

副会長からのメッセージ

「Qの展開」を目指して



中央大学 教授
中條 武志

日本品質管理学会では、中期計画で「Qの展開」を第二の柱にかかげ、積極的に取り組んでいます。2005年よりソフトウェア部会、医療の質・安全部会が活動を始めていますが、これらに加えて、2008年3月から原子力安全特別委員会が新設されました。

原子力安全特別委員会の目的は、原子力分野において、事故・不祥事が頻発し、これらを防ぐ目的で品質保証の考え方・方法論が活用されはじめたことを受け、このような社会の動きを学会として後押しすることです。2003年に制定されたJEAC 4111「原子力発電所における安全のための品質保証規程」は、ISO 9001をベースに作られた規格です。電力事業者はこの規格に沿って自社の実情にあった保安規定を作成し、その遵守状況を国が保安検査で確認するというのが制度の骨格ですが、形式面が先行し、現場の負担感が増した反面、その有効性を疑問視する声が出ています。

原子力安全特別委員会の活動の重点は3つです。第一は、原子力安全・保安院の後援を受け、日本原子力学会ヒューマンマシシステム部会/社会・環境部会との共催で行っている「原子力発電の安全管理と社会環境に関するワークショップ」です。すでに、「原子力安全」「不適合管理」「人的要因」をテーマに3回開かれました(半年1回)。第4回は「情報の共有」をテーマに2008年9月26日に東京で開催される予定です。原子力安全を確保するために何とかしなければならないという危機意識を持った、ヒューマンファクター、品質管理、社会技術の三分野の専門家が一堂に会して議論している点、産官学が一体となって取り組んでいる点がユニークであり、今後の展開が期待されます。

第二は、原子力安全基盤機構や社会安全研究所が中心となって2007年より進めている「原子力安全に

関する技術マップ・人材マップ」の作成です。原子力分野の人に起因する事故・トラブルを整理し、典型的な失敗のタイプを明らかにした上で、これらを防ぐ上で有効と思われるヒューマンファクター技術、品質管理技術、社会技術を整理し、それぞれの分野の研究者・専門家を一覧表にまとめる作業を進めています。品質管理分野では、作業の標準化、教育訓練、部門間連携、デザインレビュー、エラー防止、方針管理、日常管理、小集団改善活動、品質管理教育、自己評価などが重要なキーワードになっています。

第三は、実践のための指針の開発です。品質保証の形骸化を防ぐ手段として、根本原因分析(RCA)が着目されており、「事業者の根本原因分析実施内容を規制当局が評価するガイドライン」やJEAC 4111の附属書「根本原因分析のガイド」の作成が進んでいます。また、学会としては、JSQC選書の一つとしてRCAに関する原則・手順を解説した一冊を2009年に発行したいと考えています。その他、「規制当局が事業者の安全文化・組織風土の劣化防止に係る取り組みを評価するガイドライン」「品質保証検査ガイド」「返還廃棄物の確認に関する基本的考え方(日本原子力学会標準)」などにも積極的にかかわっています。

品質管理は実学です。基本は変わりませんが、適用領域に合わせて具体化すること、実践のための必要なツールをパッケージ化して提供することが大切です。そのためには、適用領域のニーズを深く知ることが必要で、「協力する」という気持で、何を困っているのか、なぜ困っているのか、どうやったらうまくいくのかを一緒になって考え、汗を流すことが求められています。